

新神学者シメオンの光体験

——『教理講話』に基づいて——

0. はじめに

十世紀から十一世紀を生きた新神学者シメオン（九四九—一〇二二）は、東方キリスト教会において神学者の称号を有する三人のうちの一入である。シメオンの思想は自身の大きな二度の光体験によって確立されており、その思想は当時の教会当局からは危ないものと捉えられていた。なぜならシメオンは教会のヒエラルキーではなく、シメオンの霊的指導者であった師父シメオンの教えを重んじていたからであった。シメオンの思想の特徴は「神は光である」と断言し、著作すべてにおいて「光」という単語が散りば

鳥居 小百合

められていることである。シメオンはその「光」を見るために「悔い改めの涙」が必要であるといい、「光」と「悔い改めの涙」の関係性を強調していた。

本論文ではシメオンの光体験を読み解き、光体験によってシメオンは何を得たのか、一度目と二度目の光体験のどこが異なるのか、そして、その二度の光体験がシメオンの神化思想にどのような影響を与えたのかを考察する。

1. 新神学者シメオンの生涯

最初にシメオンの生涯についてニケタス・ステタトスの

『新神学者シメオンの生涯』をもとに簡単に紹介する。²⁾

新神学者シメオンは、ガラティア地方のバシレイオンという町の裕福な貴族の家庭に生まれた。幼少の頃からシメオンは知的で聡明であった。またシメオンは短期間で本を暗記してしまうほど学業において優れていた。また容姿も端麗で際立っていたのである。その後、シメオンは父方の叔父でビザンティン帝国の官吏であったバシレイオスに連れられて、コンスタンティノープルに上京し、その宮廷で教育を受けることになった。しかしシメオンは、その叔父の計画について嘆き悲しんでいた。なぜなら、神を失うという怖れをシメオンは感じていたからである。

その後、叔父の推薦によつて宮廷で仕えることになったシメオンは、十四歳で靈的師父となる師父シメオンに出会い、その師父シメオンの神に向けての敬虔な行いに惹かれ、教えを受けることになった。シメオンは師父シメオンから靈的読書のために修徳行者マルコスとフォティケのディアドコスの著作を受け取っている。その当時、シメオンは昼間は俗世の仕事である帝国の官吏として働き、夜は靈的な生活である祈りを中心とした生活を送っていた。その時に一度目の光体験をしたのである。

その後、シメオンは叔父がこの世を去つたのち、一度故郷に帰り、そして二十七歳になったときに、父の反対を押し切つて師父シメオンのいるストウディオス修道院に入る。シメオンは師父シメオンの教えのすべてを神の口から聞いたように保持し、そして靈的に深まっていくさなかに、二度目の光体験をした。しかしシメオンの信仰に対する熱心さと靈的進歩の速さ、また師父シメオンがシメオンを熱心に教えることに反発をした仲間の修道士たちは、シメオンと師父シメオンを引き離すようと修道院長に訴え、シメオンは追放されることになった。そのためシメオンは師父シメオンの勧めに従つてコンスタンティノープルの南西部にあり、ストウディオスから北西に半マイルもない距離にある聖ママス修道院に移ることになった。

聖ママス修道院に移つたシメオンは、司祭に叙階され、三十一歳で修道院長に選ばれ、その後二十五年間、聖ママス修道院の院長として修道士たちを導くこととなった。當時、聖ママス修道院は世俗的な修道士が多く、靈的に朽ちかかつていたため、シメオンは修道士たちに向けて熱心に教え、靈的に刷新しようと努力をしていた。しかし、シメオンの熱心さのあまり、世俗的な修道士たちは反乱を起こ

し、総主教シニオスに保護を求めた。その者たちは追放され、反乱はおさまったものの、その後、一〇〇三年から一〇〇九年の七年間にわたり、シメオンとニコメディアの府主教ステファノスとの間で論争が起こり、大きな問題に発展することになった。

ステファノスとの論点は、シメオンが位階制を重要視するのではなく、一修道士であった師父シメオンの教えを重要視したことにあつた。シメオンが自身の霊的指導者である師父シメオンの死後、師父シメオンのために祭儀を執り行つたり、師父シメオンのイコンをキリストや聖人たちと並べて飾ることをしたことに對しての反発であつたようである。ステファノスは教会の位階制を重要視し、位階制のもとで信仰生活することが重要であつたと考えていたために、シメオンの教えは教会の位階制を脅かすようにステファノスには感じられたのである。一〇〇九年、教会当局はステファノスの意見を尊重し、また、シメオンの考えに脅威を感じたためにシメオンを追放した。

シメオンはその後、コンスタンティノープルとクリュソポリスの間に位置するパルキトンという小さな町に船で上陸し、そこにあつた荒廢した礼拝堂の隣に弟子の寄進に

よつて聖マリナ修道院を建築したのである。ここでもシメオンは師父シメオンの祭儀を行ない、以前より増して靈的に熱心に弟子たちに教えていつた。そのシメオンの熱心な教えによつて聖マリナ修道院は靈的開花することになった。その後、総主教セルギオスによつて追放は解かれ、復位を認められることになったが、シメオンはそのまま一〇二二年にこの世を去るまで、聖マリナ修道院にとどまり、弟子たちを熱心に指導していつた。シメオンの五十八編からなる『神の愛への賛歌』は、この聖マリナ修道院で聖靈の激しい力によつて書いたものである。内容は、シメオン自身の見神である光体験を証言するものである。

2. 新神学者シメオンの光体験

次にシメオンの光体験について確認する。最初に『教理講話』第二十二講話に述べられている、第一回目の光体験を見てみよう。

ここでは、修道院に入る以前の二十歳ぐらいのゲオルギオスという名の青年の体験が語られている。この青年にシメオンは自分を仮託し、三人称表現を用いてその時の体験

をこう示している。

ある日、彼は立って、口でというよりは、心の中で言った。「神よ。罪人なる私に恵みを与えてください」。すると突然、溢れるばかりの神の光が上方から彼に輝き、その場所全体を光で満たした。これが起こった時、その若者はわからなくなり、自分が家の中にいるのか、または屋根の下にいるのかも忘れてしまった。彼は至るところ光だけ見、地面に立っているかどうかもわからなかった。彼のうちには落下するのではないかと、いう恐れもなかったし、世の気がかりもなかったし、人間たちや体を持つものたちにふりかかってくることもどの何ものにも、その時（そのような）考えには近づかなかった。その代わりに全体的に非質料的な光とともにあり、自分自身が光になってしまったように彼には思われ、この世のことはすべて忘れて、涙と言い表しえない喜びと歓喜に満たされた。それから彼の知性（*ego*）は天へ昇り、手元の光よりいっそうはつきりとした別の光を彼は見たのである。不思議な仕方、その光の近くに、先に話に上ったかの聖人すなわち天

使にも似た老人が、彼に現われた。この老人とは彼におきてと書物を手渡した人である。⁽³⁾

シメオンは当時すでに師父シメオンに師事しており、この師父はシメオンの神秘靈性的素質を見抜き、シメオンに日々の祈りを勧め、靈的読書の対象として修徳行者マルコス（？―四三〇頃）⁽⁴⁾とフォティケのデアドコス（四〇〇頃―四六〇）⁽⁵⁾を推薦している。シメオンは師父シメオンからこれらの書物を、神から与えられるかのように深い愛と敬意をもって受け、そこに書かれた内容に深く信頼を寄せ、そこから大きな益と成果を得たいと願ったと思われる。弟子のシメオンはこの修徳行者マルコスの著作のうちの三つの「章」に惹かれたと、『教理講話』第二十二講話には書いている。すなわち以下の三章である。

①「もしあなたが癒されたいならば、あなたの良心を磨いて、良心が告げることを全部行いなさい。」

②「おきてを果たす前に聖靈の働きを探すものは、買収されるときに解放してくれと頼む奴隷のような

ものである。」

③「体で祈り、いまだに靈的認識をもっていないものは、『ダビデの子よ、私を憐れんでください。』と叫ぶ盲人である。しかし盲人は視力を回復して主を見るとき、もはや『ダビデの子』とは言わないで、『神の子』といい、ふさわしい仕方です。祈ったのである。」⁽⁶⁾

シメオンはこの三つの章を次のように理解していた。まず、①については「己の良心に注意を払うことで靈魂の病が癒されると断言しているのを心から信じた」⁽⁷⁾。②については「掟に服従することで聖靈の恩寵を受け、靈魂が生きて生き活動し始める」というように。③は「聖靈の恩寵によって己の内的な眼が開かれ、口では言い表せない主の美しさを見る」⁽⁸⁾ことができるということ信じ、理解して祈りを続けていた。

修徳行者マルコスの著作には、「苦しい出来事によって、知性ある人は神を想起し、同様に神を忘れた人は打ちひしがれる」⁽⁹⁾と書かれているように、罪の源である神の忘却を

問題視し、そして、神の恵みだけがわれわれの生である御方をわれわれの内面で思い出させること、さらに、この想起がわれわれを絶えざる喜びで満たすことを強調している。また神を想起するために、「神を思い起こす時には、祈りを多くせよ。それはお前が神を忘れる時、主がお前を思い起こしてくださいるために」⁽¹⁰⁾と書かれているように、祈りの重要性も説かれている。シメオンはこの著作を読んでから、夕方の祈りを毎日欠かさず続けるようになり、その祈りはだんだんと長くなって深夜まで及んだ。そしてシメオンは良心の声のみに耳を傾けて、その良心の勧めることをすべて行なうようになった。このように、師父シメオンから渡されたマルコスの著作の内容を信じ、純粹に祈りを続けたことで神の恵みである光に与ったのだと思われる。この光体験は、シメオンの純粹さゆえに起こったことであると言えるであろう。この時期、シメオンは昼間は貴族の家の雑用をこなす世俗の仕事をしていた。しかし、毎夜、罪を嘆き、涙を流しながら、彫刻のように不動のまま直立して神に祈っていた。そのように祈っていたある夜突然、先に示したこの不思議な光体験をしたのである。

また、ニケタス・ステタトスの『シメオンの生涯』では、

シメオンが大きな喜びに満たされ、暖かい涙を流し、そしてその光の真ん中にいる間、言い表すことができず、輝く雲のようなものが、天にあったと書いている。その輝く雲をシメオンは神の表現できない栄光であると考えていた。

シメオンはこの光体験において、自分の知性が天に昇った時に、諸天使に匹敵する老人を見ているが、その老人は師父シメオンであると理解できる。それは、シメオンは当時まだ修道士ではなかったが、師父の指導に絶対的な信頼をおいて、世俗にいながら靈的な祈りを続けていた。そのシメオンにとって靈的指導者である師父シメオンは神のごとく崇高な存在であった。それゆえにこの老人とは師父シメオンの幻像であると理解できるといえよう。このことについて、シメオンはあくまでもゲオルギオスから聞いた話として、「ゲオルギオスからこの話を聞いた瞬間に、私は彼が靈的指導者からの大きな助けを受けており、この指導者の到達した高い徳の段階を示すために、神は、若者がこの幻影を目にするのを許されたのだと知った」と述べている。この内容からもわかるように、師父シメオンは靈的に高い人物であったことが裏付けられる。しかし、光は眩しく直視できないにもかかわらず、そこに弟子のシメオンが

師父シメオンを見たことは不思議なことではないだろうか。師父シメオンは修道院の修道院長ではなく、一修道士にすぎなかったが、靈的に卓越しており、また予見の力リスマをそなえていた。シメオンはこのときまだ修道士ではなかったが、師父シメオンの靈的指導のもと、日々言われたことを忠実に守り、その中で最初の大きな光体験をしたのである。

この体験で、シメオンはまたこの光とは別の光も見ているが、その別な光とこの非質料的な光とがどう違うかはここでは述べられていない。その光の近くに「聖人すなわち天使にも似た老人」が立っていたのである。その老人が師父シメオンであるという理由は、シメオンに「おきてと書物を手渡した」人物が実は師父シメオンであったからである。また『教理講話』第三十五講話にも師父シメオンが光の中に現れたことの叙述がある。

人間を愛する王よ。あなたは人生の暗闇の中と悪いものの中に身を置いている私に、あなたの聖なる光で輝かせて、そしてこの光の中であなたは私に聖なる人を現わしてくださいました。

あなたは、あなたの聖なるシメオンを私に喜んで現わしてくださいました。⁽¹⁸⁾

あなたの神的な光が、全てのものとみじめな私を照らす。そして夜を昼のように強く照らした時、あなたはあなたの神性の高みにおいて、天において見るように、畏れ多い仕方です。彼（師父シメオン）を現わしてくださいました。彼はあなたの神的な栄光の近くに立っていました。あなたは彼に冠を被せることもなく、輝く衣服を着せることもなく、変容した容姿で飾られた光景ではなく、そうではなくあなたは彼が私たちと一緒に生きていた時のように、毎日地上で見ることができるような仕方です、私に彼をその天において現わしてくださいました。⁽¹⁹⁾

このようにシメオンは、光の中で師父シメオンを見たとき述べている。師父シメオンは変容した輝く姿ではなく、この世に生きている時と同じ姿で光の中に現れている。なぜならそれはシメオンの第一回目の光体験の時にはまだ師父

シメオンが存命していたことが原因かもしれない。またこの部分で神化はこの世から始まっていることをシメオンは表現したとも考えることができる。この世で生きながらも神化は始まっており、師父シメオンのような生き方が、神化への歩みであるということをシメオンは確証を得たともいえよう。

このことについてアルフェーエフは、「シメオンは決してキリストが目に見えるイメージとして現われるとは言わない。しかしただ光について語り、ときにはキリストの声を語るとしている。ついですが神の母のヴィジョンを決して記述することはしない。ただ一度だけひとりの聖人、つまり彼の霊的師父である師父シメオンが、神の光の近くにいると記述しているだけである」と触れているが、詳しく述べてはいない。

一度目の光体験後、シメオンはヨアンネス・クリマコスの『天国への階梯』を日々の霊的読書として加え、クリマコスの書物の言葉がシメオンの心の土地の種になった。⁽²⁰⁾

3. 二度目の光体験

次に、シメオンが修道士になってからの光体験である、第二の光体験について述べてある『教理講話』第十六講話を見てみよう。この体験は、シメオンにとって徹底的な自己変革をもたらすことになる。ここではシメオンはその時の自身の体験を、ある若者から聞いた話であると兄弟たち（修道士たち）に述べている。

私はいつも祈っていた場所に入り、聖なる人の言葉に心を留めて、『聖なる神よ』と祈りはじめました。するとすぐに涙が溢れ、神への憧れに私はひどく心を動かされた。その時、私が感じた喜びと愉快は言葉で表すことができないほどだった。しかし私はただちに地面にひれ伏し見た。見よ、偉大な光が知的に（*organic*）私の上に輝いており、私の知性全体と魂（*psychic*）をその光へと引き寄せた。そうして私は突然の不思議な出来事に驚愕し、そして忘我（エクスタシス）の状態に陥った。それにもかかわらず、私は自分が立っていた場所を忘れ、自分が誰なのか、どこにいるのかも忘れ、ただ『主よ、あわれんでください』と叫ぶだけであった。実際、これらのことは正気に帰っ

たときに知ったのであるが（…）しかし、父よ、語るには誰なのでしょうか。私の舌を動かしているのは誰なのでしょうか。私は知りませんが——彼は続ける——神は知っています。なぜなら身体においてか、身体の外でか、私はその光と語り合ったのです。それは光自身が知っていることです。そして光は私の魂の中にいる闇とこの世のすべての思いを追い払い、そして私が私の肢体に倦怠と麻痺を与えていたおおよそ厚みのある質料と身体的な負担とを取り去ったのです。

シメオンはこの二度目の光体験をした時期、師父から修行中の人々に天から生じてくる神聖な照明のことや光の充滿とそれを通して行なわれる神と人間との語らいについて聞かされていた⁽²⁴⁾。シメオンはその師父の言葉にいつも驚きにうたれ、大きな望みと情熱を抱いており、そのために「地上的なものと天的のものとの一切を忘れ果て⁽²⁵⁾てしまったのである。シメオンは何も食わず、飲まず、眠らないことが光に与ることの条件であると受け取ってしまったのである。しかしその様子を察した師父シメオンは、「神が喜んで現われてくださるのは、断食でもなく、徹夜でも

なく、肉体の労苦によるのではなく、それ以外の適った行為でもない。へし謙遜でただ単純で善い魂と心だけである」とシメオンに助言を与えたのである。この言葉を聞いて、シメオンは本当に重要なことに気づき、涙を流している。シメオンは行ないのみにこだわっていたために、神に對して謙遜と清貧でなくてはならないことを忘れてしまっていたのであろう。師父のこの言葉に衝撃を受け、自分の

罪深い過去を知性を働かせて思い出し、涙にくれることになった。またシメオンは「エリヤからエリシヤに与えられた」⁽²⁷⁾ように、師父からの言葉を弟子として受けている。その時の師父シメオンの言葉は、「わたしは恵みを溢れるほど授けてくださった神に信頼する。神は、あなたが神とわたしのような者に対していただく信頼のゆえに、あなたに二倍もの恵みを授けてくださるだろうから」⁽²⁸⁾というものであった。この師父シメオンの言葉から、シメオンが師父に全幅の信頼を置き、歩んでいたと読みとることができるとシメオンは師父シメオンから言われたように「三聖唱（トリサギオン）」⁽²⁹⁾を唱え、折り始めた時に彼はこの光の経験をしたのである。この体験がなぜ起こったか、その原因を探っても詳しく記述されていない。この三聖唱についてペ

リカンがラードネシュのセールギイ（？ー一三九二）の例を挙げて、この修道士は「三聖唱（トリサギオン）」を歌っている時、キリエを唱えている時、悔い改めの祈りを祈っている時」⁽³⁰⁾に神との交わりの神秘的体験に恵まれたとしている。だが、こうした光体験は通常は起こらないと思われる。また祈りの修練を積んだからといって、誰もがこの体験を恵まれるとはいえないであろう。

シメオンは物事を非常に深く感じ取ることが出来る特別な靈性を身につけた人間であったのかもしれない。もちろん彼は純粹に神を求めていた。シメオンはこの光体験をするさなかで、自分が「腐敗の衣服を脱ぎ捨てるように思えた」と述べている。これは肉的重みと質料的な厚みを取り去ってくれたと考えられる。それは無上の忘我の体験であり、その結果は、主にあわれみを乞うという一言に集約された。この光体験は、神を光として体験したものであり、それは当然のことながら永続するものではなく、また現実に引き戻される必然性のあるものであった。シメオンはこの体験後のことを、こう述懐している。「私に現われたその無限の光がいくらか穏やかにおさまり、縮んでいったとき、私は我に返りました。そしてその光が突如として私の

内で働いたことを知り、またその光が離れてしまったことを思い、大きな悲しみと重い苦痛にとらわれました。しかし、私の心の中に火のように燃え上がった複雑で激しい苦痛の大きさは、十分に説明できないほどのものでした」と。

この記述からすると、シメオンはこの光体験の後、以前にもまして神を乞い求めるようになったことが理解できる。

光は突如としてシメオン自身の内で働いたのであり、前触れなどはなかった。光が去ったことでシメオンは悲嘆しひどく苦しんだ。だが、その悲しみはシメオンにとっては光への憧れを強めるものであり、信仰を深めるものであったと想像できる。この体験自体、実際に我に返ったシメオンに対して、信仰生活において悔い改めがいかに必要であるかを教えてくれたいたのである。

シメオンは光体験をした時に、天から神秘的に語る声を聞いている。それは次のようである。

これらのものは謎であつて始まりにすぎない。肉をまつている限り、あなたは完全なものを観想できないからである。とはいえ、自分自身に向き戻つてそこにあるものから離れてしまわないように気をつけな

い。あなたがわき道にせれるとしても、それは謙遜を思い出すためである。回心することをやめないように。回心こそが、私の人間への愛とあなたを一致させることで、過去と現在の過ちを消滅させるものなのである。

ここでシメオンは、回心すなわち悔い改めの重要性を天からの声によつて学んでいるのである。悔い改めは神化を目指す人間にとっては、死ぬまでくり返されるべきものでなければならなかった。この天から聞いた神秘的な声の体験は、彼自身の教えに深く結晶したにちがいない。新神学者シメオンの教えの中心は、まさしくこの回心すなわち悔い改めだからであるといえるであろう。

こうしてシメオンのいう光体験は、三位一体の神や御父、キリスト、聖霊を光として体験することであつたが、この光体験はまさしく「ヘシカズムを奉ずる祈りの練達の士によく生じるもの」であつたといえよう。

4. 一度目と二度目の光体験の相違点

ここでシメオンの二度の光体験を比較してみたい。大

きな違いは、一度目は知性 (wisdom) が天上に昇っていたが、二度目は知性 (wisdom) と魂 (soul) がともに同時に天上に昇っていることである。wisdom は精神的なものであり、soul は精神と肉体的なものの中間のものである。²⁷⁾ この違いから、一度目と二度目の体験時のシメオンの霊的次元が異なっていると考えることができる。つまり後者では、シメオンがただ知性のみならず、身体 (body) とも関わる魂ごと上昇するのであり、その意味では、よりいっそう人間全体をとらえているといえるのである。これらのことから後者において、シメオンの神との一致のいっそうの深まりが体験されているといえよう。またシメオンは、一度目の体験では、光は部屋中を満たしており、その中に自分が溶け込んだかのような感覚にとらえられ、二度目の体験では、彼は「身体においてか、身体の外でか」²⁸⁾ わからない光体験をしていると述べている。これは前者がまだ光を対象的に外に見ている面が強いのに対し、後者では自身の内にも体験していることであり、このことも光をいっそう自己の全体性においてとらえていることを反映していると思われる。そのことから、二度目の体験はシメオンの全体的救いに向っているといえる。

また、一度目の光体験では光が先にシメオンに現れ、そのあとに涙を流しているが、二度目の光体験では祈り始めてすぐに涙が溢れ、そのあとに光が現れており、光よりも涙が先であったという相違点がある。その相違点を考えてみると、一度目は神の光に与かったという喜びが大きく、その喜びによって流した暖かい涙であるが、二度目の光体験では涙が先行しているという点で、シメオンの悔い改めが強調されている。その悔い改めの涙によって神の光に与かることができ、知性だけでなく、魂までもが神の光に引き寄せられたのである。

一度目の光体験をした数日後に、シメオンはまたこの世のことに悩まされるようになったが、神への祈りにおいてシメオンは世俗を離れることを欲し、神とだけ向きあう修道院生活に入るようになった。世俗の生活を送りながら、キリストのおきてを守って言葉と行ないの両方をふさわしく保ち続けることは、やはり困難なことであり、シメオンはついに修道生活を選んだと思われる。しかし修道院にあって、キリストのおきてを忠実に守りながら生きることは厳しい修煉であった。ただしその自我を摩滅させる苦行のさなかで生じた二度目の光体験は、その修煉のいっ

その徹底さによって、シメオンの存在全体に及ぶものとなっており、その点からして、シメオンが説く、人間の理想的あり方である神化に、より近づいたといえるであろう。

またこのシメオンの光体験には、霊的な指導者である師父シメオンの存在が大きかったといえるであろう。それはシメオンの心の中を見抜き、正しい方向に導いているのが本文から読み取ることができる。『教理講話』第十六講話において、師父シメオンのことについて「予見のカリスマをそなえていた」³⁹⁾とはつきり述べている。一度目の体験時は、まだ修道士ではなかったが、シメオンは師父シメオンに指導を受けていた。『教理講話』第二十二講話において、光体験ができた理由を「霊的指導者から大きな助けを受けて」⁴⁰⁾いると述べている。また二度目の光体験が起こったことについて「自分の霊父を愛し信頼していた」⁴¹⁾という理由からだったとも述べており、やはり師父の霊的指導の賜物であると思われる。

更に一度目の光体験と二度目の光体験の相違点はもう一点ある。それは一度目の光体験では師父シメオンを光の中でシメオンは見ているが、二度目の光体験ではシメオンの知性が神的知性と語り合っている点である。その神的知性

とシメオンの知性の語り合いについて次にみていきたい。

5. 神的知性との語り

シメオンの二回目の光体験について述べた『教理講話』第十六講話では、神秘的な神の声を聞いていることが述べられている。第十七講話ではシメオンの知性が神的知性と語り合ったと述べる。最初にその箇所を見てみよう。

しかし神的知性 (Divine Being) は私の知性と語り合った。そして (神の知性は) 次のように言ってくれた。「あなたは、私の力が、あなたをしてわずかの信仰と忍耐を通して、あなたの愛を確かなものとする状態に、人を愛するあまり、なしたことがわかるだろうか。見なさい。死に支配されている存在であるが、あなたは不死になる。そして腐敗に支配されているが、腐敗を超越していることを見出す。あなたはこの世に住み、そして私と共に存在している。あなたは肉体を身につけるが、肉体の快楽によって引きつけられることはない。あなたは外面上は小さいが知性的に見える。確かに私が

あなたを存在していなかったものから、存在するものに引き出したのである⁽⁴³⁾」

ここで語っているのは神的知性である。この言葉を聞いたシメオンの知性は畏れ、そして喜び次のように述べる。

私は誰ですか、主よ。罪深く、汚れたものである私、全くもって、確かにあなたは私にまなざしを向け、語り合う価値があるとみなされたとは。汚れがなく、目に見えず、そして全てのものが近寄ることが出来ないあなたが、どうしてあなたの燦然とかがやく栄光と恩恵によって、私に近づき、甘く、美しく現れる形で示されたのですか⁽⁴⁴⁾。

神的知性とシメオンの知性との語らひは以上のようであった。二回目の光体験について述べる第十六講話においてシメオンは、天から神秘的に語る声を聞いていることは述べている。それは「これらのものは謎であって始まりにすぎない。肉をまとっている限り、あなたは完全なものを観想できないからである。とはいえ、自分自身に向き戻つ

てそこにあるものから離れてしまわないように気をつけなさい。あなたがわき道にそれるとしても、それは謙遜を思い出すためである。回心することをやめないように。回心こそが、私の人間への愛とあなたを一致させることで、過去と現在の過ちを消滅させるものなのである⁽⁴⁵⁾」という内容であり、神的知性とシメオンの知性が語り合ったことについては述べてはいない。しかし「かつて私がこの歩み始めたとき⁽⁴⁶⁾」とこの第十七講話の最初において述べており、二回目の光体験は修道院に入る以前のものであったので、二

シメオンは他の部分では「神的知性」という言葉を用いてはいない。ここでは筆者は *Noûs deiôs* を神的知性と訳した。シメオンは自身の知性との会話であるために *Noûs deiôs* としたのではないかと筆者は考える。

また、シメオンはこの神的知性と語り合った時のことを次のように述べる。

私は（神的知性の）これらの言葉を神秘的に、また思いもよらぬ仕方であらう聞いて、答えた。しかし自然本性を超えたこのことは私を驚かせ、恐れのために私を強

いて後ずさりさせたのである。⁽⁴⁷⁾

このようにシメオンは神的知性と語り合ったことに対して喜びをもつて述べるのではなく、「自然本性を超えた⁽⁴⁸⁾」体験をしたことに対する驚きが先行していたのである。シメオンの知性が「罪深く、汚れたものである私に、あなたは明らかにそして現に見て語り合う価値があるとみなしたのですか⁽⁴⁹⁾」と神的知性に問いかけているように、汚れない神の人間に与える愛があまりにも大きいことを体験したことで、シメオンは驚きを感じただけではなく恐怖を感じたのであった。神はシメオンにとって「燦然とかがやく栄光と恩恵によって、私に近づき、甘く、美しく現れる形⁽⁵⁰⁾」で現れた。そしてその神の光は「上昇の終わりに⁽⁵¹⁾」与えられ、「さらに明らかな光を光によって⁽⁵²⁾」シメオンに与えた。またその光の「その真ん中において、太陽は明るく輝き、そしてそこから光線が外へ噴出し、すべてのものを満たした⁽⁵³⁾」のである。シメオンは神のこの大きな恩恵を受けたことによって、自身の知性が上昇した状態のとき、「もつとも甘い涙⁽⁵⁴⁾」を流したと述べている。この「もつとも甘い涙⁽⁵⁵⁾」とは神から与えられた賜物であったとシメオンは考え

ている。

さらにシメオンはこの体験について次のようにも述べる。

「おお、なんとという驚くべき不可思議さよ。神の掟の力は、それらを実践し守る人々をどれほどの状態に仕上げるのであろうか」と叫んだ。⁽⁵⁶⁾

シメオンは「祈りの実践と神の言葉の熟考⁽⁵⁷⁾」を絶えず行い、自身の内にある罪に常に目を向けていたのである。その悪に目を向けることこそが「愛と善⁽⁵⁸⁾」に必要なものだったのである。なぜなら、その行為は自身の「重荷である根深い癖と肉欲の悪い習慣⁽⁵⁹⁾」から逃げることであり、その行為こそが「善に向かって駆り立てる⁽⁶⁰⁾」ことになるからである。さらにシメオンは祈りの力について次のように述べる。

太陽が徐々に昇ると、暗闇は退き消えるように、そのようにして、徳は輝き、悪は暗闇のように、追い払われる。⁽⁶¹⁾

このように絶えず祈ることにより徳の輝きを得て、シメオンは神と語り合うことができたのであろう。またシメオンは次のように神からの声を聴いている。

悪いしもべよ。その言葉のゆえに私はあなたを裁く。

あなたが言っているように、上（天使たち）の序列に、とつても近寄りがたいものであるこのわたしが出来て、あなたの内に住んだとき、それをあなたは知っていないが、あなたの罪の闇のもとに、私を埋めたままにする。ちょうどあなた自身が実際に言っているように。そして多くの時間にわたって私は辛抱強く耐え、あなたの悔い改めを期待して待ち、また私の掟を果たすのを待ち受けていたのであるが、あなたは私をどんなにしても見つけ出すことを、終わりまで望まなかったし、あなたの内に押し込められている私をあなたは憐れまなかつたし、また、失ったドラクマである私を見つけて出すことはなかつた。あなたは私が明るく輝き、あなたを見、あなたから見られることを許さないが、あなたの内の情念から常に覆い隠されていることは許しているのである。そういうわけだから、私から去りなさい。

い。不義を行うものたち、悪魔たちと彼の使いたちのために準備された永遠の火の中に入りなさい。私があるた自身の回心と悔い改めに飢えているのにもかかわらず、あなたは私に食べるものを与えなかつた。私はあなたの救いに渴いているのに、あなたは私に飲み物を飲ませなかつた。私はあなたの徳のある行いを奪われて裸だったのに、あなたはそれを私に着せなかつた。私はとても狭くて、汚れていて、暗いあなたの心の牢屋の内にいた。それなのにあなたは私を訪ねたり、また光の中に連れ出すことを望まなかつた。あなたはあなたのだらしなさとなげの無力（病い）の内に、私が横たわっていることを知っている。それなのにあなたはあなたの善の業と行為を通して私の世話をしなかつた。さあ、私から立ち去りなさい。

この箇所では神はシメオンに対して忠告を与えている。神が内在していることを知っているにも関わらず、神を罪の暗闇に埋め込んだままにするからである。それでも神は人間が悔い改めるのを心待ちにしていたのであるが、気づくことなく神が明るく輝くことを許さないのである。そん

な人間に対して、去れと神は警告をしている。また、神が人間の狭く、汚れている暗い心の牢屋の内にも関わらず、それに気づくこともなかった者に対して立ち去れと忠告している。このように神は心に内在しており、人間は常に神の声に耳を傾け、その声によって導かれていくことが望まれているのであるといえよう。

6. おわりに

シメオンは二度の光体験について『教理講話』で詳細に語り、その体験をもとに修道士たちを導いていた。しかしシメオンのように自身の体験を述べることは、師父たちは行つてこなかった。そのことについてフォティケのデアウドコスが「照明を受けていないときには、霊的な観想的諸対象に専念してはならない。聖霊の恵みによって豊かに照らされたときには、語ろうと試みてはならない。なぜなら（前者のときのように）欠乏があるところでは、それは無知をもたらし、（後者の場合のように）豊かな恵みがあるところでは、それは語ることを許さないからである。（…）従つて語ろうとするときには、（上述の両極端の）中庸を守つて、

神的な事柄を語らなければならない。というのも、この中庸こそが、神を賛える言葉の調和を靈魂に授けてくれる」と語るように、神的な体験を語るときには、詳細に語ることは許されていないのである。また神は不可知であり、言葉で表現できないものであるために語ることはできない。そのために修道士たちは危険に感じたとも考えることができる。しかしシメオンにとって光体験ということは、霊的指導者である師父シメオンの教えを受けているときに聞いていたことであり、それがシメオン自身の身に起こったことである。確信を得、それが彼自身の思想の基盤となったのである。そのために、この自身の体験を話すことが重要であつたと考えていたのではないだろうか。

シメオンにとって光体験はパウロの回心に似て、シメオンの霊的道のりを決定づけるものであつた。そして二回あつたこの光体験は、一度目と二度目で大きな違いがあり、シメオンの霊的な深まりを感じることができる。

シメオンの光体験はシメオンの思想の基盤であり、光体験をすることによって神化への道のりが歩めると理解していたのだろう。そして光体験はシメオンにとって神への憧れを強くするものであつた。なぜなら神の光は神の愛に

よって与えられるものであり、甘美なものであるとシメオンは二度の光体験で感じ取っていたからである。神の光はその人間に応じて神から一方的に与えられるものであるが、与えられるためにはその人間が自身の内に神が内在しているということを気づかなくてはならないとシメオンは強調するのである。それはシメオンの次の言葉から理解できる。

「最初に魂の目でもって光を見ないなら、そして人間の内で神の照らしと働きを詳細に知ることがなければ、誰も光について語ることはできない⁽⁶⁴⁾」と、シメオンは述べ、魂の眼で光を見るという。ここでもシメオンは神の内在について述べており、心は神がいます場所であると考えていることがわかる。

また「神が光なしに現れることは不可能である。神の光を見たことのない人々は、神を見たことがないのである。神は光だからである。光を受けたことがない者は、恩恵をまだ受けていない。恩恵を受けた人は、神の光と神自身を受けたからである。光としてキリストは言う。『私は彼ら(人間)の内におり、彼らの間で活動している』⁽⁶⁵⁾とシメオンは述べている。神の光は神からの一方的に与えられる恩恵であり、いつ与えられるのかは誰も知ることはできない

い。我々人間は三位一体の神の光をいつ与えられてもいいような状態であることが重要なことであるといえよう。そのためには洗礼をうけたキリスト者は、三位一体の神が人間の内に内在していることを自覚して生きていく必要がある。シメオンは三位一体の神の光に与った人間として、その当時では考えられないような大胆な証言をし、人々を救おうとしていたといえよう。

(岐阜県立羽島北高等学校常勤講師)

* なお本論文は博士論文「新神学者シメオン研究―祈りにおける光・涙・神化」のシメオンの光体験に関する箇所を一つにまとめ、加筆・修正したものである。

註

(1) 東方キリスト教会において神学者の称号が与えられているのは、福音記者ヨハネ、ナジアンソスのグレゴリオス、新神学者シメオンである。

(2) Nicasius Stenhatos, *The Life of Saint Symeon the New Theologian* (以下 *Life* と略記する), translated by Richard P.H. Greenfield,

Harvard University Press, 2013 224頁。

- (3) Syméon le Nouveau Théologien, *Catéchèses* (以下 *Cat.* と略記する), tom. II (6-22), introduction, texte critique et notes par Mgr Basile Krivochéine, traduction par Joseph Paramelle, Sources Chrétiennes, No.104, 1964, 22.88-104.
- (4) 修道業者マルコスはアンキュラ修道院の近くにある別の修道院長であったが、その後、独居し、様々な霊的小冊子を残した。その書物の特徴は神の忘却が罪の根源であることを強調している点である(レイ・ブイエ『キリスト教神秘思想史Ⅰ 教父と東方の霊性』大森正樹他訳、上智大学中世思想研究所、平凡社、一九九六年、四〇九頁参照)。
- (5) フォティケのディアドコスは、神の似姿として創造された人間の霊的完徳性を追求して、その霊的戦いを禁欲、苦行、謙遜、従順により、神を想起させる「イエスの祈り」において実現すると見る。フォティケのディアドコスの著作である『見神』や『公教要理』は、新神学者のメオンに影響を与えているとどうぼに、両者は一面で近い思想を示している (Cf. P. Dinkelbacher, *Wörterbuch der Mystik*, Kröner, 1989, pp.111-112)。
- (6) *Cat.*, 22.38-51.
- (7) *ibid.*, 22.52-56.
- (8) *ibid.*

- (9) *ibid.*
- (10) 修行者マルコス『霊的な法について』二〇〇の断章(第五六番、宮本久雄訳(『フィロカリア』新世社、二〇〇七年所収)二二八頁。
- (11) 前掲書第二五番、二二四頁。
- (12) *Cat.*, 22.102-105.
- (13) cf., Hilarion Alfeyev, *St. Symeon the New Theologian and Orthodox Tradition*, Oxford, 2000, pp.234-235.
- (14) *Cat.*, 22.105-108
- (15) cf., *Cat.*, 16.17-20.
- (16) *ibid.*, 34-35.
- (17) *Cat.*, 35, 87-90.
- (18) *ibid.*, 100-102.
- (19) *ibid.*, 103-110.
- (20) cf., Hilarion Alfeyev, *ibid.*, pp.234-235.
- (21) *Life*, p.17 参照。
- (22) H. Alfeyev ʒ intellectual と訳している (H. Alfeyev, *ibid.*, p.138)。
- (23) *Cat.*, 16.78-98.
- (24) cf., *ibid.*, 16.9-12.
- (25) *ibid.*, 16.15-17.
- (26) cf., *ibid.*, 16.14-16.
- (27) *ibid.*, 16.54-57.

- (28) これは列王記下二・九一〇のくだり(渡り終わると、エリヤはエリシャに言った。「わたしがあなたのもとから取り去られる前に、あなたのために何をしようか。何なりと願いなさい。」エリシャは、「あなたの霊の二つの分をわたしに受け継がせてください」と言った。エリヤは言った。「あなたは難しい願いをする。わたしがあなたのもとから取り去られるのをあなたが見れば、願いはかなえられる。もし見なければ、願いはかなえられない。」で、シメオンは預言者エリヤが火の戦車に乗って天に上るときに、弟子のエリシャはエリヤの霊を受けることを願ったことを念頭に置いている。
- (29) *Cat.*, 16.72.
- (30) *ibid.*, 16.67-70.
- (31) 三回の聖なるかな、の意味。「聖なるかな神、聖なるかな強き方、聖なるかな不死なる方、われらを憐れみたまえ。」と唱える。
- (32) J・ペリカン『キリスト教の伝統 第二巻』鈴木浩訳、教文館、二〇〇六年、三五九頁。
- (33) *Cat.*, 16.99.
- (34) *ibid.*, 108-117.
- (35) *ibid.*, 127-144.
- (36) 大森正樹「新神学者シメオンとその神秘体験」八三頁。
- (37) *Lexikon für Theologie und Kirche*, Herder, 1993-2001 の

“Seele” 及 “Vernunft” の項参照。

- (38) *Cat.*, 16.91-96.
- (39) *ibid.*, 16.17-18.
- (40) *Cat.*, 22.105-108.
- (41) *Cat.*, 16.148-149.
- (42) cf., *Cat.*, tom I, Introduction, p.158.
- (43) *Cat.*, 17, 40-48.
- (44) *ibid.*, 50-54.
- (45) *Cat.*, 16, 127-144.
- (46) *Cat.*, 17, 12.
- (47) *ibid.*, 55-57.
- (48) *ibid.*, 56.
- (49) *ibid.*, 50-51.
- (50) *ibid.*, 52-54.
- (51) *ibid.*, 35.
- (52) *ibid.*, 35-36.
- (53) *ibid.*, 36-38.
- (54) *ibid.*, 39.
- (55) *ibid.*, 39.
- (56) *ibid.*, 9-11.
- (57) *ibid.*, 19-20.
- (58) cf., *ibid.*, 14-15.
- (59) *ibid.*, 18.

- (60) *ibid.*, 14-15.
- (61) *Cat.* 17, 21-23.
- (62) *FH.* 10, 646-669.
- (63) フォテイケのデアアドコス『イリュリクム州旧イエーペイロス地方のフォーテイケーの主教、至福なるデアアドコスの百断章に分けられた実践的な「修徳行に関する論述」すなわち「霊的な認識と識別について」宮本久雄訳、『フィロカリアⅡ』新世社、二〇一三年所収) 二〇三頁。
- (64) *FH.*, 5, 266-269.
- (65) *Cat.*, 28, 102-118.